

令和6年度 沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展

発掘調査速報

2024

2024年

7/17(水) → 8/18(日)



令和5年度の
調査成果を
いち早く公開！

目次

| | |
|------------------------------|----|
| ごあいさつ | 1 |
| 令和5（2023）年度発掘調査実施箇所位置図 | 2 |
| 中城御殿跡 | 4 |
| 大工廻八所集落跡 | 8 |
| 伊佐上原第三遺跡・伊佐上原南遺跡 | 10 |
| ヤニバマ遺物散布地 | 14 |
| 県内出土遺物保存処理 | 18 |
| 水中遺跡確認調査に伴う木製品の保存処理 | 22 |
| 沖縄歴史年表 | 24 |

【凡例】

1. 本図録は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「発掘調査速報2024」〈開催期間：令和6（2024）年7月17日～8月18日〉の展示を補完するものとして編集・作成しました。
2. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得なくても、本図録を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。

ごあいさつ

沖縄県内には、貝塚やグスク、戦争遺跡など旧石器時代から近現代に至る約4,900カ所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人たちが残したこれらの埋蔵文化財を調査し、考古学的見地から検証した成果を沖縄県の歴史・文化の解明や研究に役立てています。

通常、発掘調査が始まってから、土器や石器などの出土遺物を整理し、報告書を刊行するまでには数年の歳月を必要とします。そのため、当センターでは発掘調査で得られた最新の成果を、県民にいち早く見ていただきたいとの思いから、前年度に実施した発掘調査の成果を紹介する「発掘調査速報」展を毎年開催しています。

今回は、琉球国王の世子の邸宅であった「中城御殿跡」(旧県立博物館跡地)や嘉手納弾薬庫地区(知花地区)内の「大工廻八所集落跡」、普天間飛行場内の「伊佐上原第三遺跡・伊佐上原南遺跡」、キャンプ・シュワブ内の「ヤニバマ遺物散布地」の発掘調査成果について、出土遺物や写真パネルなどを通して紹介します。

さらに、時間の経過とともに劣化しやすい金属や木製の出土品について、長期的な保存と活用を図るために実施した、保存処理事業の成果についても紹介します。中でも、水中遺跡の調査で見つかった木製品の保存処理は、当センターにおいて初めての試みとして注目されます。

本展を通して、多くの方々が遺跡や遺物などに接し、沖縄の歴史と文化、先人たちの暮らしに想いを馳せるとともに、埋蔵文化財の価値やその重要性について理解を深める一助となれば幸いです。

令和6年7月17日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 池田 潤

令和 5 (2023) 年度 発掘調査



だ く じやく やと うえーしやう らく あと

大工廻八所集落跡

所在地 沖縄市大工廻（嘉手納弾薬庫地区知花地区）

時代 グスク時代、近世・近代



なか ぐすく う どうん あと

中城御殿跡

所在地 那覇市首里大中町

時代 近世・近代



実施箇所位置図



ヤニバマ遺物散布地

所在地 名護市辺野古（キャンプ・シュワブ内）
時代 弥生～平安並行時代からグスク時代、
近世～近現代



伊佐上原第三遺跡・伊佐上原南遺跡

所在地 宜野湾市伊佐・大山（普天間飛行場内）
時代 縄文時代、グスク時代、近世・近代

な か ぐ す く う ど う ん ぎ と
中城御殿跡

| | | | |
|------|---------------------|-----|----------|
| 事業名 | 首里城公園発掘調査 | 所在地 | 那覇市首里大中町 |
| 調査期間 | 令和5年7月1日～令和5年11月30日 | 時代 | 近世・近代 |
| 調査面積 | 200㎡ | | |

----- はじめに -----

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成19（2007）年度から中城御殿跡の発掘調査を実施しています。今回の調査は、石積みなどの遺構が、どのような範囲・状態で残されているかを確認することを目的としており、調査成果は中城御殿跡を公園として整備・活用していくための基礎資料となります。

中城御殿は、次の琉球国王となる王子が暮らした屋敷を指します。名称の由来は、王子が領地として中城間切を与えられ、中城王子あるいは中城御殿と呼ばれたことによります。

中城御殿は当初、今から400年ほど前の尚豊王の代（在位1621～1640年）に、現在の首里高等学校の敷地内（首里真和志町）に創建されました。それから200年以上後の明治8（1875）年に、旧県立博物館跡地（首里大中町）に移転しました。

今回の調査では、移転後の中城御殿跡において2本のトレンチを設定して掘り下げました。その結果、土地造成の跡や、屋敷を区画する石積みなどが見つかりました。

----- 発掘調査の成果 -----



中城御殿跡の位置（国土地理院地図）



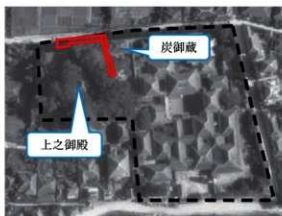
「首里古地図」に描かれた中城御殿（沖縄県立図書館所蔵（一部加筆））

《1700年頃～1875年 近世から近代》

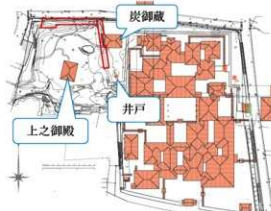
今から300年ほど前の様子を描いた「首里古地図」を見ると、龍潭の北側には北谷御殿や本部按司、福地親雲上、阿嘉嶺筑登之などの屋敷があったことがわかります。

トレンチ1-1～3では、土地をかき上げるための造成土が広範囲で見つかりました。この造成土は、地山のマージ（赤土）を利用しているため、赤褐色をしており、石灰岩礫や暗褐色土などが混入しています。さらに、グスク土器や中国産染付、明朝系灰色瓦などグスク時代から近世頃の遺物が混入していることから、中城御殿以前の造成土であることがわかりました。

トレンチ1-4では、土留めの石積み8～10を検出しました。石積み8～10は、サブトレンチからの出土品が近世を主体としていることから、中城御殿以前の石積みであると考えられます。



戦前の航空写真（沖縄県教育庁）



中城御殿の屋根伏せ図（沖縄県土木建築部）

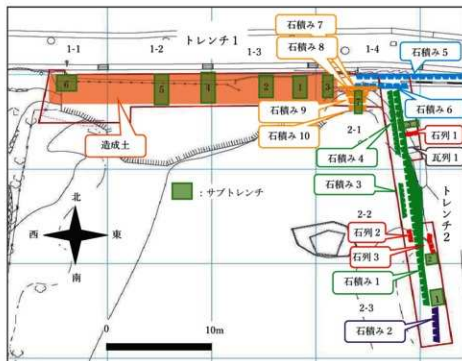
《1875年～1940年 近代から沖縄戦》

明治1（1868）年に、おおむらあじ大村按司、まふにまじ摩文仁按司、かびらうまかた川平親方、おろくべーらん小禄親雲上らの宅地を合わせた土地に中城御殿を移すことが決まったことが「球陽」に書かれています。

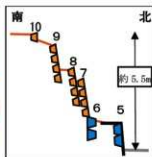
このように複数の屋敷があった場所に中城御殿を造るために、古い建物の解体や、新しい建物の建築に加えて、土地の造成や、屋敷を取り囲む石垣を整備するなど様々な工事が行われました。

トレンチ1-4とトレンチ2では、上之御殿地区を区画する土留めの石積み（石積み1・3・4）が見つかりました。この石積みは、主体となる石積み1の裏側に、補強のための石積み3・4を積むことによって、土圧に耐えていると考えられます。

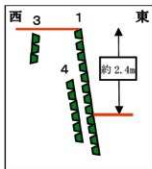
また、中城御殿の北辺を区画する石積み（石積み5・6）が見つかりました。石積み5は、岩盤を利用して石を積んでいます。上部は残っていないため、正確な高さはわかりません。



遺構平面図



石積み5～10 断面図



石積み1・3・4 断面図

| 名称 | 時代表 | | | 内容 |
|----------|-----|----|----|----------------|
| | 以前 | 当時 | 戦後 | |
| 1 石積み1 | | ○ | | 上之御殿の東辺。 |
| 2 石積み2 | | ? | | |
| 3 石積み3 | | ○ | | 石積み1の内部構造。 |
| 4 石積み4 | | ○ | | 石積み1の内部構造。 |
| 5 石積み5 | | ○ | | 中城御殿の北辺。岩盤を利用。 |
| 6 石積み6 | | ○ | | 石積み5と対。 |
| 7 石積み7 | | | ○ | 石積み6の上に積まれる。 |
| 8 石積み8 | ○ | | | |
| 9 石積み9 | ○ | | | |
| 10 石積み10 | ○ | | | |
| 11 瓦列1 | | | ? | 畑の跡か。 |
| 12 石列1 | | ○ | | |
| 13 石列2 | | ○ | | |
| 14 石列3 | | ○ | | 「池状遺構」の西端。 |
| 15 造成土 | ○ | | | 赤土を利用。 |

遺構一覧表



トレンチ1 造成土・地山



トレンチ1 サブトレンチ5



トレンチ1 サブトレンチ4



トレンチ1 石積み5～9



トレンチ2 石積み1・2



トレンチ2 石積み1・3



トレンチ2 石積み1・4



トレンチ2 石積み1・4・5・6

だくじやくやとくろく-しめうらくあと 大工廻八所集落跡

| | |
|------|--------------------------|
| 事業名 | 嘉手納弾薬庫地区（知花地区）内埋蔵文化財発掘調査 |
| 所在地 | 沖縄市大工廻（嘉手納弾薬庫地区知花地区） |
| 調査期間 | 令和5年4月4日～令和5年7月12日 |
| 時代 | グスク時代、近世・近代 調査面積 1,000㎡ |

はじめに

大工廻八所集落跡は、嘉手納弾薬庫地区（知花地区）内の施設工事に伴い、令和4（2022）年度～令和5（2023）年度にかけて実施した発掘調査です。令和4年度の調査は、集落内に所在する近世～近代期の屋敷跡の調査を行いました。当初の予定では、集落内に所在する屋敷跡のみを調査する予定でしたが、調査を進める中で大工廻八所集落形成以前のグスク時代にも同地を利用していたことがわかりました。このため、令和5年4月～7月にかけて追加で調査を行いました。

発掘調査の成果

近世～近代に造られた屋敷を囲うアムトゥ（盛土）の下層から、グスク時代の柱穴が多数見つかりました。柱穴の中や周辺からは、グスク土器や口禿白磁碗、玉緑白磁碗、青磁劔花文碗、ウシ菌などの遺物が出土しました。これにより、12世紀から13世紀にかけて利用された集落であることがわかりました。また、柱穴内の土色や土質などの特徴をもとに柱穴を分類すると、複数棟の建物が建てられていたことがわかりました。建物の中には、約2.8m×約6.7mの中柱を有する比較的大きな建物もありました。

「比較的大きな建物、倉庫跡と考えられる建物、複数棟の建物跡」が確認できたことから、グスク時代において同地に集落跡が存在していたことが判明しました。

しかし、近世～近代の屋敷を造る際に東側の土地は大きく削平され、グスク時代の集落跡の一部は削り取られていました。そのため、集落の規模や建物の数などの全容を確認することはできませんでしたが、グスク時代や近世から近代までの異なる時代においても同地を生活の場として利用していたことがわかりました。



調査地点 (google map に一部加筆)



調査区全景 (南から)

伊佐上原第三遺跡・伊佐上原南遺跡

| | |
|------|--------------------|
| 事業名 | 基地内文化財分布調査 |
| 所在地 | 宜野湾市伊佐・大山（普天間飛行場内） |
| 調査期間 | 令和5年9月1日～令和6年3月15日 |
| 時代 | 縄文時代、グスク時代、近世・近代 |
| 調査面積 | 270㎡ |

はじめに

基地内文化財分布調査は、沖縄県内の米軍基地や自衛隊基地の中にどのような遺跡があるのかを把握することを目的として、平成9(1997)年度から実施しています。普天間飛行場内では、現時点で110カ所の遺跡が確認されています。

今回の調査は、伊佐上原第三遺跡（縄文時代・グスク時代）と、伊佐上原南遺跡（近世・近代）について、より正確な範囲と遺跡の性格を明らかにすることを目的として実施しました。

発掘調査の結果、各時代の遺構や遺物を確認することができました。



令和5年度調査地点

伊佐上原第三遺跡の調査成果

縄文時代

はっきりとした遺構は確認できませんでしたが、土器や石材が出土しました。

グスク時代

土坑及びピット（用途不明の穴）を複数検出しました。また、地山上に堆積した黒色土の広がりや遺構は、調査した場所から南西方向に広がっていきることがわかりました。



伊佐上原第三遺跡 トレンチ1 グスク時代の溝跡検出状況（東から）



伊佐上原第三遺跡 トレンチ1 グスク時代の溝跡内 遺物の出土状況（くびれ平底土器の底部）

伊佐上原南遺跡の調査成果

近世・近代

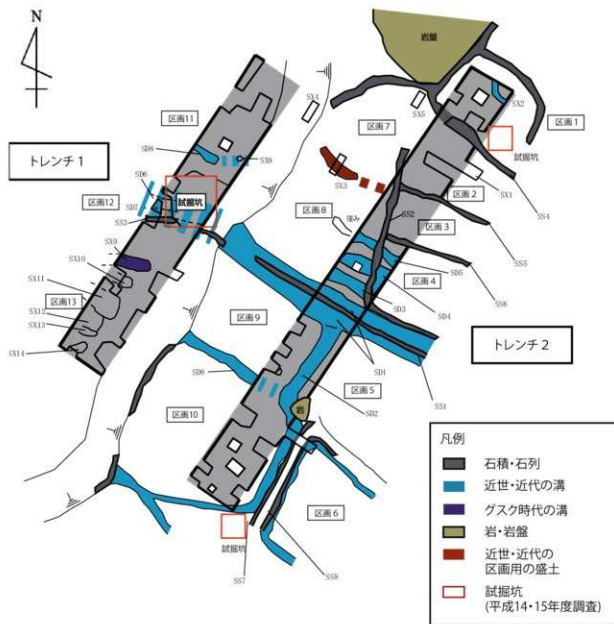
畑を区画したとみられる石列や石積み、溝の跡を確認することができました。一部の溝では溝が使われなくなった後に石列を配置した状況がみられることから、区画を造り替えながら畑が営まれた可能性があります。



伊佐上原南遺跡 トレンチ2 区画2・3 近世・近代の石列検出状況（西から）



伊佐上原南遺跡 トレンチ2 区画4・8・9 近世・近代の石列・溝跡検出状況（西から）



令和5年度 調査区概略図

ヤニバマ^{いぶつさんぶち}遺物散布地

| | | | |
|------|-------------------------|------|----------------------|
| 事業名 | キャンプ・シュワブ内埋蔵文化財発掘調査 | | |
| 所在地 | 名護市辺野古（キャンプ・シュワブ内） | | |
| 調査期間 | 令和5年4月25日～令和6年2月29日 | | |
| 時代 | 弥生～平安並行時代からグスク時代、近世～近現代 | 調査面積 | 1,080 m ² |

はじめに

～4つの時代の痕跡が埋まっていた～

キャンプ・シュワブ内に流れる美謝川の切り替え工事が行われることになり、工事範囲内に所在するヤニバマ遺物散布地の記録保存を目的として、発掘調査を行いました。

発掘調査の結果、弥生～平安並行時代前半（約2000～1500年前）、弥生～平安並行時代後半からグスク時代の初頭（約1500～800年前）、近世・近代（約400年前～戦前）、近現代（戦前～終戦直後）の4つの時代の遺跡が見つかりました。

発掘調査の成果

◆海水面の変化と人々のくらし 《弥生～平安並行時代前半期》

弥生～平安並行時代前半の地層からは、当時の人々が食べた貝が集中する遺構や柱穴跡、土器片が出土しました。また、堆積する白砂層には、細砂層の間に汀線（海面と陸地の境界）であったことを示す粗砂層が挟まっており、さらに白砂層最上面の北側（海側）には、軽石が多量に埋没していました。遺構や遺物は細砂層から見つかりますので、この時代には海水面が2～3m程度上下を繰り返して、離水時に人々が暮らしていたことがわかりました。

◆古代沖縄の塩づくり？ 《弥生～平安並行時代後半期からグスク時代初頭》

弥生～平安並行時代後期からグスク時代の初頭からは、地層が黒砂に変化します。そして多数の柱穴や当時の人々が食べた貝や、土器片が集中する状況などが確認され、この時代にムラが営まれていたことがわかりました。また、遺物の中には内面に布目の痕が残っている土器が見つかりました。この土器は古代の奄美群島や九州の製塩土器と酷似しており、このムラでは九州との繋がりが塩づくりが行われたことが伺えます。

◆ヤニ集落や沖縄戦直後の痕跡 《近世・近現代》

近世・近代の地層からは、窯跡や集石、土坑、溝跡及びうね跡、柱などの穴が検出されました。これらは、『辺野古区誌』に記されたヤニ集落の遺構と想定されます。さらに、ドラム缶2本を埋設した性格不明の遺構も検出されました。ドラム缶の流通年代や検出状況等から、大浦崎収容所跡に関連する可能性があります。



←ヤニバマ遺物散布地位置図

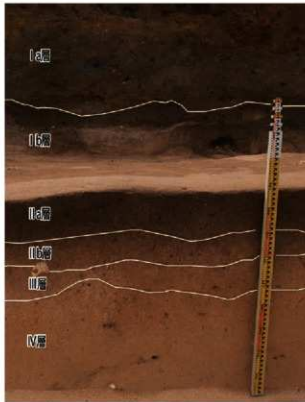
ヤニバマ遺物散布地はキャンプ・シュワブ内の北側に位置する。東には海岸が広がり、南北と西は丘陵に囲まれる。また、遺跡の南側には戦争遺跡である大浦崎収容所跡が立地する。

※地理院地図（シームレス空中写真）を加工して作成

地層堆積状況と出土遺物→

発掘調査によって、以下の地層が確認された。

- I a 層：現代の造成土層
- I b 層：近世・近現代の溝、うね跡
- II a 層：黒砂層①（近世・近代）
- II b 層：黒砂層②（弥生～平安並行時代後半からグスク時代初頭）
- III層：白から黒砂に変化する層（弥生～平安並行時代後半）
- IV層：白砂層（弥生～平安並行時代前半）

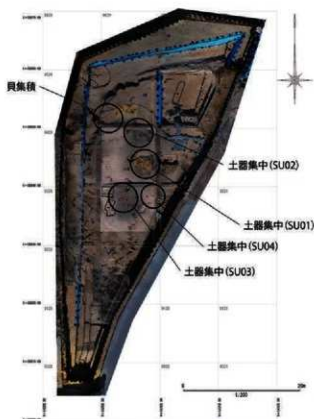


←↑IV層白砂層の遺構と遺物

IV層は細かい白砂層で、当時の人々が食べた貝の集積（写真左上）や弥生～平安並行時代前半の土器（写真右上）が見つかった。加えて、軽石が混ざる層や粗砂層の間層が挟まることから、少なくとも3回は2～3m以上の海面上昇が発生したことがわかった（写真下）。

II b・III層の遺構と遺物

遺構分布図（弥生～平安並行時代、グスク時代）



↑柱穴跡

III層からは柱穴跡が多数検出されており、掘立柱建物が建っていたことを伺わせる。



↑遺物集中（SU01）内遺物出土状況

多数の土器片がまとも出土した。土器片の接合によって、数個体の土器の破片が散らばった状況であったことがわかりつつある。



↑II b層土器・貝類出土状況

土器は弥生～平安並行時代後半のもの。二枚貝を素材とする貝鍾と一緒に出土しており、この時代には海の資源を利用していたことがわかる。



↑土器出土状況

土器は弥生～平安並行時代後半のもの。近世・近代の溝内から横たわった状態のまま原形を留めて埋まっていた。

I b・II a層の遺構と遺物



↑貝集積

多数の貝や陶磁器が集中して出土した。食べた貝や壊れた陶磁器をまとめて捨てた跡とみられる。土器が混ざっている点も注目される。



↑窯跡 (SL01)

中央は熱を受けて赤黒くなり、砂も固く締まっていた。側面は粘土で二重の壁が構築されている。本来はドーム状だったと想定されるが、後世の開発で壊されたようである。



←↑ドラム缶埋設遺構 (SX01)

周囲に粘土を貼ったドラム缶が2基埋設されていた。さらに、その隣にタイルのように敷かれたテーブルサンゴと石で方形に空間が構築されている。近世・近代のうね跡を掘り込む状況やドラム缶の流通時期を考慮すると、終戦直後の遺構と考えられる。

県内出土遺物保存処理

事業の目的

発掘調査によって出土した遺物の中には、金属製品や木製品、石造物など、時間とともに劣化していく材質の遺物が含まれます。このような遺物に保存処理を施し、長期的に保存・活用できるような状態にすることを目的として本事業を実施しています。

金属製品の保存処理

令和5（2023）年度は、中城御殿跡（旧県立博物館跡地）から出土した金属製の香炉や蓋、煮沸具など計14点の保存処理を実施しました。いずれもブロンズ病の症状が見られるものや、錆の生成や亀裂等により劣化の進行が見られたため、保存処理を行う必要がありました。作業には専用の機材や薬品が必要なことから、専門業者に委託しました。綿密なクリーニングと化学的な保存処理を行ったことにより劣化への耐久性が増し、長期的な保存や積極的な活用が可能となりました。

（1）保存処理の手順

保存処理作業は、はじめに遺物の状態観察や写真撮影、X線撮影等を行い、処理前の記録を作成します。次に遺物に付着した汚れを落とすクリーニング作業や錆の進行を止めるための安定化処理を行い、最後に強化・防錆処理を施すための樹脂を含浸させて固めることにより作業は完了します。

— 処理前調査 —



①処理前の状態観察・記録作成



②処理前写真撮影



③ X線透過撮影（内部の状態を確認）



④蛍光 X線分析（非破壊調査）

— クリーニング作業～樹脂含浸 —



⑤ クリーニング作業（メスを用いた錆等除去）



⑥ 洗浄作業（有機溶剤での土砂・油分除去）



⑦ 錆の安定化处理（BTA 含浸による脱塩）



⑧ 樹脂含浸（アクリル系樹脂）



⑨ 接合作業（エポキシ系接着剤）



⑩ 樹脂塗布（アクリル系樹脂 + つや消し剤）



⑪ 処理前遺物（蓋）



⑫ 処理後遺物（蓋）

(2) X線透過撮影と蛍光X線分析

金属製品の事前調査として、錆や汚れが付着した遺物本体の形状と内部の状態を確認するX線透過撮影と材質を調べる蛍光X線分析(EDXRF)を実施しました。

蛍光X線分析は文化財の材質調査で広く用いられる手法の一つで、試料を破壊しなくても材質を分析でき、遺物保存の観点から見ると有効な手法といえます。

今回は14点の遺物を分析しましたが、ほとんどの製品が銅を主成分とし、他にも亜鉛や鉛、錫等を含む結果となりました。このうち1点の香炉は錫を多く含むことから、青銅である可能性が高いことがわかりました。また、他の製品でも銀などを多く含むものがあり、含有する成分の分布状況から、遺物の表面に何らかの装飾が施されていた可能性を伺うこともできました。

また、下の写真にある煮沸具のX線透過撮影を行ったところ、遺物の中に3cm程の多孔質構造の塊が確認できました。この塊の蛍光X線分析を行った結果、カルシウムを主成分とする物体であることや、孔の隙間に銅や鉄の破片が大量に含まれることが判明したため、煮沸具の清掃に利用されていたものと推測されます。



煮沸具（保存処理前撮影）



X線透過
写真に写る塊



煮沸具内に残っていた塊

(3) RPシステムによる簡易保存処理

金属製品は錆の進行を防ぐため、空気や水を通さない特殊な袋に無酸素状態で密封保管しています。

(三菱ガス化学：RPシステム)



RP処理を施した遺物

木製品の保存処理

県内の遺跡からは、稀に木製の遺物が出土することがあります。

通常、有機質である木材は土中で分解されてしまいますが、水分が多い地中など分解の原因となる微生物が発生しない環境では長期間残ることがあります。

こうして出土した木製品は、取り上げた後に水漬けの状態でご保管します。しかし、長い間水漬けのままでは微生物による腐敗や浸食などが進み、遺物が崩壊してしまう可能性があります。

そのため、当センターでは「トレハロース含浸」という方法で遺物中の水分をトレハロースという糖類に置き換え、結晶化させることによって長期的な保存を可能とする作業を行っています。

—トレハロース含浸方法—

- ①トレハロース含浸前に、遺物を水中から取り上げて状態を観察・記録する。
- ②トレハロース濃度 20%・水温 30℃の水溶液に遺物を浸し、7日～10日毎に温度と水溶液の濃度を上昇させる（最終段階のトレハロース濃度は 80%）。
- ③水溶液での含浸作業を終えたら、扇風機で乾燥させる。重量の減少が緩やかになった段階で自然乾燥させ、結晶化を促す。
- ④重量減少が止まったことを確認できたら、スチームクリーナーで温風を当て、遺物の表面に付着した結晶を除去する。
- ⑤再度十分に乾燥させて処理完了。



①トレハロース含浸



②含浸中の木製品



③扇風機を用いた風乾



④結晶化したトレハロース



⑤表面処理



⑥処理が完了した木製品

水中遺跡確認調査に伴う木製品の保存処理

潜水調査で取り上げた木製品は、脱塩と乾燥による劣化防止のため、水に漬けて保管していました。しかし、この方法でも徐々に劣化が進行してしまうため、令和5年度は木製品11点について、専門業者に委託して保存処理を実施しました。



保存処理前の保管状況

微生物等の発生を防ぐために1週間ごとに水を取り換えていた。

方法

木製品の保存処理は、従来ポリエチレングリコール（PEG）法が用いられていましたが、この方法で保存処理を行った場合、金属と木材から構成される複合遺物では金属部分が劣化することが近年明らかとなりました。そこで今回は、あらたに「トレハロース含浸」という方法を用いることにしました。この方法は、PEG法に比べて短期かつ安価で処理が可能であることや、現時点で金属製品に影響がなく、将来的に劣化等が確認された場合には処理前に戻すことができると考えられている点で、最も有効な方法と考えました。



①含浸作業

含浸には濃度と温度管理が重要。水溶液の濃度測定（左）や温度管理（右）が徹底された。



②トレハロース固化状況

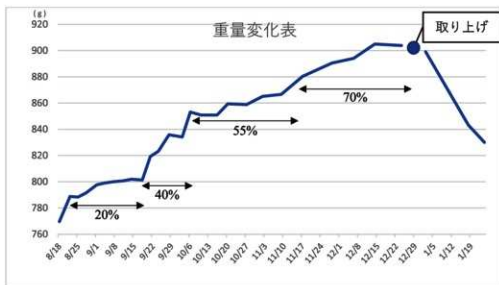
③表面処理

作業内容

保存処理は、①処理前調査→②洗浄→③トレハロース水溶液含浸(20%→40%→55%→70%)→④乾燥→⑤表面処理→⑥接合・補填→⑦経過観察の順で行いました。

トレハロースを用いる方法の課題として、遺物内への含浸が十分行き届いているかを確認するのが困難なことがあげられます。そこで今回はこまめに重量を計測し、重量上昇の停止を各濃度での含浸完了の目安としました。しかし実際に作業を進めてみると、樹種によって上昇時間の違いや上下変動などもあり、特に序盤は試行錯誤しながらの作業となりました。

水中遺跡の木製品保存処理は、全国的にもほとんど事例がありません。今回の作業は、今後の水中遺跡出土資料の保存活用にとって重要なものになると考えています。



重量変化表

展示資料の重量変化を示す。重量が上下に変動する状況がみえる。



保存処理完了後

沖縄歴史年表

| 西暦 | 前200万~1万4,000 | 前1万4,000~5,000 | 前5,000 | 前4,000 | 前3,000 |
|--------------------|--|----------------|---|--------|--------|
| 沖縄 本島 喜望峯山 | 旧石器時代 | | 早期 | 前期 | 縄文 |
| 沖縄の様相 | 山下洞人が現れる 白保人が現れる 港川人が現れる | | 土器の個性化が始まる 曾畑式土器が流入 局部磨製石斧を使用 南島爪形文土器を使用 | | |
| 今日対象となる 遺跡とその時代 | | | | | |
| 日本 中国 | 旧石器時代 | 新石器時代 | 新石器時代 | 新石器時代 | 新石器時代 |
| 日本・中国の様相 | 北京原人が現れる | | 青銅器文化が興る 竜山・鳳凰文化が形成される メソポタミアに都市国家が興る 海路が拡大になる 平底土器を製作する 仰光彩陶文化が形成される 黄河文明が興る | | |
| | 縄文海溝が始まる 尖底土器を製作する | | 弓矢の使用が始まる 土器製作が始まる 細石刃を使用する | | |
| | 局部磨製石斧を使用する 新人が東・東南アジアに到着する アフリカに新人(ホモ・サレニENS)が現れる | | | | |

| 西暦 | 600 | 700 | 800 | 900 | 1000 | 1100 | 1200 | 1300 |
|--------------------|--|---------------------|--------------------|---------------|---------------|--------------------------------|---|--------------------|
| 沖縄 本島 喜望峯山 | 弥生 ~ 平安並行時代 | | | | | | 古スク時代 | |
| 沖縄の様相 | 714 751 信覚・球美人らが徳朝する このころ開元聖が流入 | | 751 鑑真ら阿児奈波島に漂着 | | 土器が無文化するようになる | | 1187 舜天即位と伝わる 各地に大型古スクが現れる | |
| 今日対象となる 遺跡とその時代 | | | | | | | 大正廻八所集落跡(沖縄市) 伊佐上原第三道跡(宜野湾市) ヤニバマ遺物敷布地(名護市) | |
| 日本 中国 | 古墳 | 飛鳥 | 奈良 | 平安 | 平安 | 平安 | 鎌倉 | 室町 |
| 日本・中国の様相 | 607 隋の大運河の建設が始まる | 621 唐の冊土が最大版図となる | 630 遣唐使の派遣始まる | 710 平城京入遷都 | 794 平安京入遷都 | 804 遣唐使の停止 このころ系統鏡裏が興られる | 1126 鎌倉の奠 | 1274・81 モンゴルの襲来 |
| | このころ羅針針・火薬の発明 藤原氏の全盛 | | | | | | 陶磁器の輸出が盛んになる 漢字の対立 | |

文化講座のおしらせ

第 98 回文化講座 「発掘調査速報 2024」

日時 令和 6 年 7 月 28 日 (日)
14 : 00 ~ 16 : 15 / 受付 13 : 30

会場 当センター研修室

講師 当センター専門員

受講料 無料



沖縄県立埋蔵文化財センター

休所日 月曜日 (国民の休日・慰霊の日にあたる場合は翌平日に振替)
国民の休日 (こどもの日・文化の日を除く)
年末年始 (12/28-1/4)
慰霊の日 (6/23) ※その他臨時休所あり

開所時間 9:00-17:00 (入所は 16:30 まで)

住所 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

電話番号 ☎ 098-835-8752/8751

WEB サイト [○ 沖縄県立埋蔵文化財センター](#)



埋文
センター
周辺マップ